

テ、當所ハ艚戸豪賈多クシテ、人烟繁茂セリ、且支那及朝鮮等ノ漂船近地ニ來著セシ時ハ、此湊ニ引入レ、後長崎ニ護送ス、此地海門ノ藩籬ナルガ故ニ、往古島津久豊命ジテ、城下ヨリ鎌田清只兒玉某ヲ此地ニ移シ、非常ニ備ヘシトイフ、

〔西遊雜記〕^四山川の津は、海深く舟入も能湊にて、町も大概にて、風景も有所也、土人云、むかしは此浦より大守船に乗らせられ、日向洋を渡り、伊與地に添ふて御參勤ありし事也、しに、日向灘に至てあしき海上にて、いつの御代にや危き事有し故に、今は其沙汰なし、然共御館船藏御覽の通といひき、いかに能き御旅館あり、又云、此浦よりぬり舟の飛船に、艦も十挺もたて、眞一文字に南海を押切りて、伊豆の下田浦へ渡海すれば、十日のうちには必著せる事にて、日和さへあしからねば五六日に至るといへり、信じがたき事ながら、さもある事にや、經過の舟路は遠からぬやふにも思はるゝ也、

蝦夷
箱館港

〔東遊雜記〕^{十六}龜田は大概の町にして、此所を箱館へは圖略○圖のごとく三十丁計の所にて、近しといへども、御巡見所にあざれば至らず、有川の海濱より見るに、賣船數多入津して、白壁なども見えて、よき所とおもひしゆへ、案内のもの其外の人々にも委しく尋聞しに、市中は家千軒餘、松前より東の方の産物は、みなく、此所へ出るゆへに、諸州の商船多く入津して交易するゆへ、賣女杯もあまたにて、大きに繁昌せる所なりと言へり、^略○中松前の御城下を第一として、西の方にて江指浦東の方にては箱館とて、松前の三ヶの津と稱す、何れも聞しに違ひて甚よき所なり、

〔北海道志〕^七渡島國

函館港

龜田郡ニ在リ、北緯四十一度四十六分十秒、東經百四十度四十四分三十八秒、東西一

里二十町五十八間、南北一里二十四町三十三間、深凡八十九尺、港口西南ニ向フ、安政六年六月、開港シテ互市場ト爲ス、地勢海ニ斗入スルコト凡三十町、盡頭ニ山アリ、屈曲シテ巴字形ヲ爲